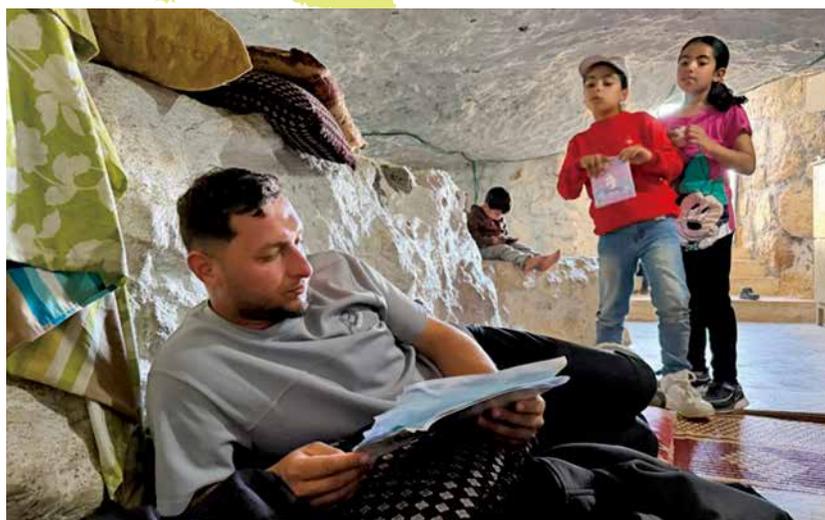


オリーブの木

No. 99

2026年2月



家を失い、洞窟で暮らすパレスチナ人（マサーフェル・ヤッタ）

マサーフェル・ヤッタは、ヨルダン川西岸地区南部に位置し、複数の小さな村や集落から成る地域です。人々は長年にわたり、この土地で家畜を育て、畑を耕しながら、土地と深く結びついた生活を続けてきました。

しかし現在、入植者による暴力や嫌がらせ、さらには軍による一方的な立ち退き命令によって、人々の日常は深刻な不安にさらされています。家屋や学校が破壊され、授業が思うように行えなかったり、洞窟での生活を余儀なくされたりする人々もいます。こうした現実、ドキュメンタリー映画『ノー・アザー・ランド（故郷は他にない）』として記録され、アカデミー賞ほか多くの賞を受賞しました。敵同士とされてきたパレスチナ人とイスラエル人の、命がけの友情から生まれたこの映画をきっかけに、多くのジャーナリストが取材に訪れ、人々の苦しみは世界に知られるようになりました。

私たちは、マサーフェル・ヤッタ、そして同じような苦しみにあるすべての人々が、安全と尊厳のうちに暮らせる日が一日も早く訪れることを願っています。とりわけ子どもたちが希望を失わず、家族と生きる喜び、学ぶ喜びを大切にしながら、平和の担い手として成長してくれることを祈っています。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

イスラエルから見たガザ

佐藤真紀 (国際協力アドバイザー)

昨年3月に続き12月に現地を訪れました。ヨルダン川西岸の南へブロンとエルサレムの滞在でしたが(3月の報告文はオリーブの木№96に掲載)、今回、一日だけ時間ができたのを利用して、イスラエル南部のステロットを訪れることにしました。ステロットはガザ北端に隣接し、丘の上からガザを見下ろせる町です。ガザからのロケット弾攻撃にイスラエル軍が反撃した2014年の戦争の時は、イスラエル軍の空爆を見学しにユダヤ人が集まって歡喜していたことから「恥の丘」とも呼ばれています。そんな場所に自分が行くのは気が咎めましたが、停戦合意はしたもののガザの友人からは、状況がひどいことを聞いていたので、少しでもガザに近づきたい気持ちが勝り、電車を乗り継いで向かいました。

ステロット駅につき、ガザ方面へ向かって歩いていくと、ニル・アムというキブツに着きましたが、警備員に制止されました。諦めて歩いていると、先ほどの警備員がジープで追っかけてきて、案内すると言ってくれたのです。キブツを通り抜けると、ガザが見えます。破壊され、瓦礫の山となった町がはっきり見えます。手前にはガザとの境界の検問所エレッ・チェックポイントにつながる分離壁、奥には地中海が見えます。波音が聞こえてきそうな距離ですが、上空ではドローンの音が鳴り続けていました。

警備員の若者は、「君にはわからないだろうけど、とても複雑な気持ちなんだ。僕はネタニヤフが大嫌いなのに、非難しないようにと言いかせなければならなかったんだ」と複雑な心境を打ち明けてくれました。

これだけ、多くの民間人を殺して これからイスラエルはどうするのか

彼は予備役で今回も何度かガザに入ったそうです。「ガザの人たちは、イスラム組織ハマスに支配されて、彼らに逆らえば仕事ももらえない、食っていけない。最悪殺されてしまうんだ。ハマスはユダヤ人を憎むように教育する。ハマスの軍服を着てなくても、僕らがガザに入っていくと武器を手にして殺しに来る。だから民間人も同じなんだ。だから、ガザの市民をハマスと切り離すために僕たちは戦っている。僕たちは、ガザを占領しようとは思わない。彼らにも僕たちのように国ができればいいと思うけど」



赤い丸印が筆者の訪れた場所

「僕の家族や友人が殺された。僕には、ガザから働きに来ていたパレスチナ人の友人もいたけど、彼らはガザで生きているのかどうかわからない。難しいけど、僕たちは、平和に暮らしたいんだ」

別れ際、彼は「本当に、見に来てくれてありがとう」と感謝の気持ちを伝えてくれました。

そのあと、立ち寄ったステロットの警察署跡地は公園となり、記念碑が建てられていました。2023年10月7日に越境攻撃してきたハマスの戦闘員が立てこもり、イスラエル軍との間で銃撃戦となった場所です。戦闘を伝えるようなものは残っておらず、18本の大きな柱が天に向かってそびえていました。18はヘブライ語で「命」という意味があるそうです。2年が経ち、この町は、日常を取り戻し、過去の悲劇よりも未来に向かっていくことを強調しているようでした。

人質広場

テルアビブの人質広場にも立ち寄りしました。今までは、きちんと交渉をしないネタニヤフ政権に対する抗議の意味合いが強かった広場ですが、残っていた人質20人が生きて帰って、終わったという安堵感と、その一方でガザ戦争の「正義」を伝えていくことがミッションになっているようでした。

説明をしてくれるボランティアの人は、「イスラエル軍のジェノサイドはありません!問題はハマスです。彼らが病院や学校の下にトンネルを作るからこのような悲惨な結果になったのです」という具合に説明していました。

ガザが見えないものに

今回感じたのは、多くのイスラエル人にとってガザの人たちは、「見えない存在」だということです。先日、日本でイスラエル関係の勉強会があり、イスラエル政府からは「戦争は終わりました。自由貿易協定の話を進めましょう。ワーキングホリデイ協定を締結して日本の若者の皆さんがイスラエルに来て働いてください。日本の外務省は、危険度2から1に下げ、日本人がたくさん観光に来るようにしてください!」とこれからの日本とイスラエルの友好関係の構

築を強調していました。

しかし、ガザは語られません。

ガザでは、国連も、NGOもイスラエルによって活動が制限されたままです。家屋は破壊されたまま。避難所では、寒い中テントすらも支援がなく自分たちで調達しなければならない状況です。日本では報道も少なくなり、我々日本人にも簡単に、ガザの人々が見えなくなるのです。改めて、聖地のこどもを支える会が行っている支援活動や情報発信は大切だと思いました。

ガザ戦争 本当の停戦・本当の解決はあるのか

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

去年10月10日、「ガザ停戦発効」が伝えられました。「10・7」即ち2023年10月7日、イスラエル人1200人余りを殺害したイスラム組織ハマスによる急襲から丸2年でした。ハマスの拠点、パレスチナ自治区ガザは、イスラエル軍による攻撃で住民7万人以上が殺害され、がれきの野が広がっています。停戦がこのまま続き、ガザ再建そして和平へという道筋は見えてくるのでしょうか。

停戦発効、人質全員解放も実現

停戦とその後の歩みは次のようなものでした。

①停戦に向けた計画に米・イスラエル合意

トランプ米大統領とイスラエルのネタニヤフ首相が昨年9月29日、ホワイトハウスで会談し、ガザでの停戦に向けた「包括的計画」に合意したと表明したものです。計画によると、ハマスの側が人質全員を解放するのが停戦の条件で、遺体の返還を含む人質の解放やハマスの武装解除の進展に応じてイスラエル軍も段階的に撤退する、となっています。

②和平案合意で停戦発効、人質解放

和平案の「第1段階」にイスラエルとハマスが合意したとしてイスラエル軍は、10月8日正午から停戦が発効したと発表しました。ハマスが人質全員の解放に同意したのを受けたもので、ハマスは13日、人質にした約250人のうち残っていた生存者20人を解

放しました。イスラエルも合意に基づき、拘束しているパレスチナ人1950人（終身刑を受けた250人と戦闘中に拘束されたガザ住民1700人）を釈放しました。ただしイスラエル軍は、人質の遺体返還に遅れやすすり替えがあり合意違反だとして複数個所で攻撃を実施、ガザ保健省によると停戦発効後も400人以上の住民が犠牲になったといっています。1月26日に最後の遺体が収容されたと発表され、この問題で合意違反を理由とする攻撃はなくなりますが、次に述べるようにイスラエル軍はガザに留まり続けており、いつでも攻撃できる態勢にあります。

③イスラエル軍の部分撤退

停戦の発効を受けてイスラエル軍は、ガザの一部地域から部隊を部分的に撤退させたと発表しました。地区内の合意地点まで後退したとしていますが、「南方司令部の部隊は現地に展開しており、差し迫った脅威の排除を継続する」とも述べ、依然としてガザ地区の半分を占拠している模様です。ネタニヤフ首相も、イスラエルとの境界の周辺地域については「当分の間は留まる」と言っています。

ガザを誰が どう統治するのか

今年に入ってウイコフ米中東特使は1月14日、停戦合意が第2段階に入ったと表明しました。米和平案には20項目の計画があるといわれ、停戦や人質

解放、イスラエル軍の撤退に関するもののほか、援助の流入、暫定的なガザ統治機関の設置、パレスチナ人の強制退去はなく将来的な統治の主体の問題などが含まれます。何をもって第1段階の終了と判断するのかが不明瞭なまま移行が表明されたのですが、第2段階には数多くの難題が立ちはだかっています。中でもガザの将来にかかわる「誰が」「どのように」統治するかが重要なポイントです。

和平案では統治計画について、トランプ氏が率いる暫定統治機関「平和評議会」を設置するとし、米ホワイトハウスは1月16日、ルビオ米務長官やブレア元英首相らがメンバーとして就任すると発表しました。幹部にはこのほか、大統領の長女の夫クシュナー氏や資産管理会社の経営者らが加わるとされています。評議会の下には実務面を支える「ガザ執行委員会」という機関が置かれ、パレスチナ人技術官僚による「ガザ行政国家委員会」という組織を監督することになるとの構想です。

平和評議会のメンバーには、いくつかの国の首脳が候補としてうわさされ、イスラエルのネタニヤフ首相が参加を表明していますが、例えばフランスは「国連の原則や組織を尊重する立場から見て疑念が生じる」として参加を見送るなど、米国以外の主要7ヵ国(G7)や欧州の多くの国は参加を要請されながら参加を確約していません。

この評議会がどのような動きをするのか、明確ではありません。スイスのダボスで1月22日、評議会設立の調印式が開かれた際、「新ガザ」の構想が発表されました。構想を述べるクシュナー氏の後ろには、海辺に高層ビルが立ち並ぶリゾート地の予想図が掲げられた映像が映し出されました。和平案ではパレスチナ人の強制退去はないとうたわれていますが、トランプ氏が1年前、200万人のパレスチナ人が住むガザを空にし米国が所有して、中東のリビエラにすると公言したことがよみがえります。どうやって停戦を確実にし、復興につなげるかの方策は示されず、明確にうたわれているのは、ハマスを統治に関与させないということです。

武装解除 ハマスは拒否貫く構え

2006年に実施されたパレスチナ自治評議会選挙では、パレスチナ自治政府を握るファタハを抑えてハマスが勝利し、翌年、武力行使によりファタハを

追い出してガザを実効支配するようになりました。以来、ハマスが担ってきた治安維持や学校、病院などの運営の役割を誰が担うのか。警察の運営や治安維持、学校や病院の運営には、誰が対応するのでしょうか。和平計画では、前述のガザ行政国家委員会がパレスチナ人などによる官僚組織としてその任に当たるという構想でしようが、西岸の自治政府など外部からの官僚が受け入れられるのか。

そして何よりも、ハマスの武装解除というのが難題です。ガザの治安維持をめぐるっては、国際安定化部隊という案が浮上しており、エジプト、サウジアラビアなどの湾岸諸国、トルコなどが候補に挙がってきました。しかし、武装解除となるとハマスとの軍事衝突が避けられず、どこも尻込みしそうです。

ハマスはこれまで、武装解除をかたくなに拒否しています。武装こそが、イスラエルによる数十年にわたるパレスチナ軍事占領に抵抗する手段だと、ハマスは考えています。

10・7のその後をパレスチナ、イスラエルで取材し「壁の外側と内側」という映画を作ったジャーナリストの川上泰徳さんは「ガザの民衆にとってハマスはかつてのファタハに代わる、占領に抗する『牙』であり、ハマスを支持するかどうかにかかわらず、ハマスに『牙』として行動することを求める思いが民衆にあるということでしょう」と見ています。2000年9月末から2005年2月にかけて起きた、パレスチナ人による2度目の大規模な抵抗闘争インティファダが無残に押さえ込まれた後、2006年の選挙で民衆がハマスを選んだことについては、ファタハの腐敗への民衆の批判を挙げるのが一般的な説明です。しかし川上さんは「民衆は自分たちの占領を拒否する『牙』としてのハマスを選んだということになるかもしれませんが。そう考えるならば、イスラエルの21カ月に及び異常な攻撃を受けても、ガザ社会が崩れることなく、抵抗の姿勢を続けているという現状を理解することができます」と言うのです。

また、「ハマスは民衆の意思から離れて10・7の越境攻撃を行い、それによってイスラエルの大規模な報復攻撃を受け、多くの民間人が犠牲になっている。だから、ガザの人々はハマスの無責任な攻撃を恨み、ハマスへの批判を強めているという見方がありますが、もしそうならば、ハマスの統治や支配はとっくに崩れているだろうと思います」とも。

イスラエルでは、よく「ガザのパレスチナ人は皆ハ

マスだ」と言われているようですが、イスラエルの力による支配がハマスのような「牙」を求める心を育て、ということを理解する必要があります。

戦争続けたい？ ネタニヤフ首相

イスラエル国民の多くは、ガザの悲惨な状況に同情を寄せていないと伝えられます。「住民は皆ハマス」という政府のプロパガンダが、苛烈な攻撃を正当化するのに受け入れられやすいのでしょう。イスラエル政府は、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）についても「職員の多数はハマスのテロリストだ」と決めつけ、その活動を制限しており、1月20日には東エルサレムにあるUNRWAの施設を破壊しました。イスラエル国民が、ガザ住民も皆テロリストと考えるなら、ハマスを殲滅を主張してガザを攻撃してきた政府の狙い通りということになります。イスラエルによる占領、強圧的な支配がなければ、パレスチナ側に「抵抗の牙」の存在を期待することも無いのに、ニワトリと卵のどちらが先かという堂々巡りに陥っているのです。

「トランプ和平計画」では、イスラエル軍の段階的撤退もうたわれています。しかし、軍はガザ地区の半分を抑えたままだし、ハマスの武装解除、ガザの非軍事化がない限りイスラエル側に完全撤退する考えはありません。「停戦合意違反」を理由にいつ攻撃が起きるかわからず、現に今でも攻撃が散発し住民の犠牲が伝えられます。

和平計画の見通しを不透明なものにしそうな要素が、ほかにもあります。イスラエルの総選挙です。現在の国会はこの年末で任期切れとなり、秋には総選挙が実施されます。収賄・詐欺・背任容疑で起訴されているネタニヤフ氏は、首相は起訴されても法律

上は辞任を求められないため、なんとしても政権を維持して首相の座を守る必要があります。そのカギを握るのが、国会（120議席）で64議席を占める連立与党のうち14議席を持つ極右政党。宗教シオニズム、ユダヤの力といった、ユダヤ至上主義で反アラブを公言し、ガザへの再入植や西岸の併合を主張する極右勢力はガザ停戦に否定的で、ユダヤの力のベングビール党首は、ハマスを解体しなければネタニヤフ内閣を打倒するとまで言っています。

ちなみに、ネタニヤフ首相は去年11月30日、自身の汚職裁判について、ヘルツォグ大統領に恩赦を要請しました。有罪判決を受けた人に対して与えられるはずの恩赦を、まだ公判中の身でありながら要請したのです。刑務所に行かないですむよう首相の座を守るために戦争もする、という批判を裏付けるかのような行為。選挙に負けた時の備えとでも考えたのでしょうか。

選挙まではまだ暫く時間があります。連立内閣延命のために極右勢力をつなぎとめる必要があるネタニヤフ首相は、あからさまな攻撃再開で「トランプ和平計画」に水を差すわけにもいかず、かといってハマスの非武装化が進まないまま計画の進行を許すとは思えません。ハマスが武装解除に応じない姿勢を維持することは、イスラエル軍を完全に撤退させることなく、いつでも攻撃する態勢を保つ口実にできます。

ガザという、天井がない牢獄と言われ自由もない空間に武力で封じ込められる限り、住民の抵抗の意思は消えないでしょう。そしてイスラエル側も、抵抗がある限り力で抑え込もうとすることでしょ。いつまた戦争が始まるかわからない地に、「中東のリビエラ」などという光景はみえてきません。

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます！

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**

または **042-636-9218** (中山)

聖地のこどもを支える会の 会員になりませんか？

さまざまなプロジェクトをはじめ、教育支援事業など、当会の活動を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員 個人 年額 12,000円/1口

学生 年額 6,000円/1口

サポート会員 年額 6,000円/1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

停戦発効後のパレスチナを語る

ヤクーブ・ガザウィ（聖地のこどもを支える会スタッフ、オルガニスト）

パレスチナ自治区ガザでの停戦が発効してから約2ヵ月半経った2025年12月22日、当法人スタッフのヤクーブ・ガザウィが、現地の情報に基づくガザの様子や、地元エルサレム、ヨルダン川西岸の実情を、オンラインで報告しました。



戦闘が常態ではなくなったが…

イスラエルとイスラム組織ハマスが合意したのは、和平案の第1段階。これにより2年に及ぶ戦闘は一応停止され、第2段階に移れるかが焦点となっている。支援物資の搬入を促進し、ハマスの武装解除、ガザの戦後統治などが課題で、和平案を主導したトランプ米大統領がイスラエルのネタニヤフ首相に、第2段階へ進むよう圧力をかけており、年明けにも移行するのではないかとヤクーブはみている（翌2026年1月14日に米中東特使が第2段階への移行を発表した）。

停戦の現状については、空爆などの攻撃、戦闘が常にある状態ではなくなって、海外からイスラエルを訪れる人も少しずつ増えた。しかし、戦争状態ではないと言えるだけで、それ以上のものではない、つまり明るい見通しがあるわけではないという。エルサレムのカトリック総大主教区のピッツァバッラ枢機卿がクリスマス前に3日ほどガザに滞在したが、破壊のすさまじさに、表情には悲しみの色が濃かった。

※国連、EUなどの試算では、ガザ復興にかかる費用は日本円で10兆円を超えるとみられている。

食料ももちろん不足し、居住施設も満足ではない。特に雨季の今、多くの住民がテント生活で水浸しになりながら寝る有様だ。そんな中で、停戦が実現してすぐにレストランが開いたり、最新型のスマホを手にする人がいたり、という様子が伝わってきた。持てる人と持たない人の格差がますます顕著になっている、ということだろう。

医療施設も医薬品も不足するため、負傷し出血するとそれを止める手立てがない。また、衛生状態の

悪化もひどいという。常に緊張や不安の中にあるためメンタル面の障害も常態化している。

国外に脱出する人は、ガザだけでなくヨルダン川西岸にもいる。西岸では入植地が増え続け、ユダヤ人入植者による暴力やイスラエル当局による家屋破壊も続いており、ヤクーブの周辺にもその影響を受け、国外へ去る人がいたという。

オンライン参加の視聴者からの「現状をどう見ているか」という問いに対してエルサレム在住のヤクーブは、仕事がないというのが深刻な問題で、ガザの停戦についてはそれどころではないというか、あまり関心はないのが現実と答えた。同じパレスチナでも、西岸の住民にとって遠く隔てられたガザは、地理的にも心情的にも遠いというのが彼の見方。連帯を示すデモが起きたとしても、パレスチナ自治政府の警察が規制するという。

「イスラエルではガザの状況が報じられないといわれるが、パレスチナ側ではどうか」という質問には、カタールを拠点とする衛星テレビのアルジャジーラはハマスに近いのでガザ報道に力を入れるが、西岸はハマスと反目するパレスチナ自治政府が統治しているので、報道にも差が出てくると答えた。

オンライン視聴者との懇談

参加者の中には、聖地のこどもを支える会の国際交流プロジェクト開始以来の支援者もいた。2005年に始まったイスラエル、パレスチナの若者を日本で交流させるプロジェクト。その提唱者ともいえるベツレヘムのイブラヒム神父が03年来日した時、広島で講演を聞いたという方は、神父が訴える対話のための若者交流が実現し、今につながっていることに感激していると言われた。20年にわたって支援し、寄付を続けていただいていることに「こちらこそ感激」と、当NPOの井上弘子理事長は改めて感謝を伝えた。

別の参加者からは、ドイツ人との対話の中でガザの悲劇を話題にしたところ、相手は「ハマスが悪い」と切り捨て、多数の住民の死についても「ハマスを支持しているのだからやむを得ない」と、同情する気持ちはない様子だったという体験を語られた。話すほどに陰悪な雰囲気になりそうなので話題を変え、ヨーロッパの人とは理解し合うのが難しいのかと思ったとのことだった。

だれもがユダヤ人の苦難だけに同情し、パレスチナ人の苦難には目を向けないという訳ではなく、パレスチナへの連帯を叫ぶ若者らもいるが、そうした動きを「反ユダヤ主義」として封じようとする傾向は根強い。第2次世界大戦時のナチスによるユダヤ

人迫害を座視したというひけめを感じる西洋社会には、今なお「反ユダヤ主義」と指弾されるのを恐れて、まっとうなイスラエル批判さえ控える風潮があり、ドイツ人との対話で聞かされたパレスチナ観も、その反映と思われる。

ガザ緊急支援の活動

皆さまのご支援は、現地の専門機関によって有効に使われています

報告の詳細は、順次
当法人ホームページで
公開する予定です

当NPOが支援するエルサレム・ラテン総大主教区は、数か月にわたり人道支援物資の搬入が停止されてきたガザをはじめとして、現地に支援物資を届けてきました。みなさまからの支援金は国際社会からのお金の中の一部として役立てられています。

ラテン総大主教区による支援は個人の宗教に関わらず、ガザ北部で苦しい状況に陥っている数十万人の難民を含む、すべての住民を対象としたものです。

彼らは2025年6月には月間300トンを超える支援物資をガザに届けることができました。また、2024年から2025年10月の期間には、ガザ市の配給センターを通じて1500トンを超える支援物資を届けることができました。

ガザだけではなく、ヨルダン川西岸地区と東エルサレムにも緊急支援を行いました。12か月間で

5600枚の食料クーポンが家庭に配られた食糧支援、2025年に2000人以上に医療ケアを届けた医療支援、過去12か月で4000件を超える雇用機会が創出された雇用支援などです。その他にも、住宅支援、乳幼児支援や奨学金や学費支援などの教育支援など、幅広い支援活動を行いました。

このように、私たちが支援しているエルサレム・ラテン総大主教区は困難な状況にある人々に助けの手を差し伸べてきました。特に、ガザ北部の人口のおよそ10%に対し、食料、清潔な水、住居といった生活に不可欠な支援を継続的に提供できたことは、停戦後も現地の人々の困難が続く中で、大きな意義があります。

今後とも皆さまの温かいご支援をお願いします。

支援を受けた人の声

ラムズィさん (ガザ地区)

46歳で7人の子どもを持つ父親で、戦争勃発以来失業しています。収入源がなく、家族は飢えと繰り返される避難という困難に直面しています。彼は食料支援に深い感謝の意を表し、数か月ぶりに受けた初めての支援だと述べました。

オデットさん (ヨルダン川西岸地区)

ラマッターの賃貸アパートで一人暮らしをしている71歳の未亡人です。乳がん、聴力問題、高血圧、糖尿病など、複数の深刻な健康問題を抱えています。彼女はラテン大司教区から医療支援として毎月500シェケル(約150ドル)の必需薬を受け取っています。加えて、自立して働けない状況から、定期的な食事や生活用品の配給も受けています。支援がなければ、彼女はがん治療と、食料や住居という生存に必要なものとの間で選択を迫られることとなります。



食料の配給を待つ人々。久しぶりであたたかいものが食べられる。



物資の配給を行うために段ボールを運び出す。

停戦後の聖地を行く



ステロットからガザを見下ろす。ドローンからの空爆を目撃



人質広場 残り2名の遺体がまだ返還されていなかった。1名はタイからの出稼ぎ労働者 (2025年12月1日現在)



ステロットのバス停

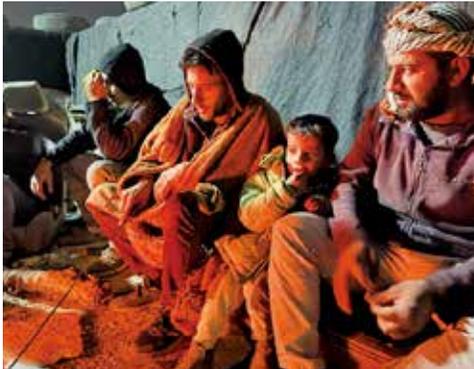


ステロットの警察署跡地



人質広場で説明してくれたボランティア

壊された生活、マサーフェル・ヤッタの子どもたち



夜、畑を荒らそうと襲ってくる入植者を、焚き火をたいて交替で見張っている



少年たちも夜の見張りをする



自宅の瓦礫の中に立つ親子



洞窟にストーブを持ち込んで暖を取る親子



お菓子を食べながらの通学、こぼれる笑顔



まだ残っている自宅で

写真撮影：佐藤真紀